

B型肝炎ワクチン（自費）

【B型肝炎について】

B型肝炎ウイルスは、人の肝臓に感染し一過性の感染や持続感染を起こします。

感染は、肝炎ウイルス（HBs抗原）陽性の母から児が生まれる際に主に産道で母体の血液に触れておこる「垂直感染」と、母親以外の家族や集団生活の中での濃厚な接触、血液で汚染された器具の不適切な使用、性的接触などで感染する「水平感染」があります。

垂直感染については母子感染予防（母体の血液検査や児へのワクチンや免疫グロブリンの投与）によりほとんどが阻止されていますが、水平感染への対策が問題となっています。

B型肝炎では急性肝炎となって回復する場合もあれば、慢性肝炎の経過となることもあり、劇症肝炎となって激しい症状から死に至ることもあります。

また、明らかな症状のないままウイルスが肝臓に潜伏し年月を経て慢性肝炎、肝硬変、肝臓癌になることがあります。年齢が小さいほどこのような持続感染のかたちをとりやすい（キャリアになりやすい）ことが知られています。

【B型肝炎ワクチンについて】

組み換えDNA技術を応用してつくられた、不活化ワクチンです。

小児では持続感染を防ぎ慢性肝炎、肝硬変、肝臓癌の発生を予防することがワクチンの最大の目的です。

最も感染リスクが高いのは母子感染ですが、他の家族からや集団生活の中で感染する可能性も考慮し、なるべく早く抗体をつけることがすすめられます。

3回接種して抗体が獲得できる率は年齢が若いほど高く、効果は30年以上持続します。

現在国内では用いたウイルスの遺伝子型の異なる2種類のB型肝炎ワクチン（ビームゲンとヘプタボックス）が流通していますが、互換性があります。

副反応は接種部位の腫れ、痛み、発赤等が主で、発熱はほとんどありません。

※ヘプタボックスのバイアルのゴム栓にはラテックスが含まれていますのでアレルギーのある方には注意が必要です。

【接種方法】 10歳未満 0.25ml を皮下接種

10歳以上 0.5ml 皮下接種

【スケジュール】 計3回接種します。

2回目：1回目から4週間後

3回目：1回目から20～24週間後

※当院では特にリスクが高い場合を除き、生後2カ月から接種を行っています。

【接種費用】 任意接種のため自己負担になります。

平成28年10月から定期接種となる予定です。

【持参するもの】 任意接種用予診票（体温以外の項目をあらかじめ記入しておいてください。）

母子健康手帳